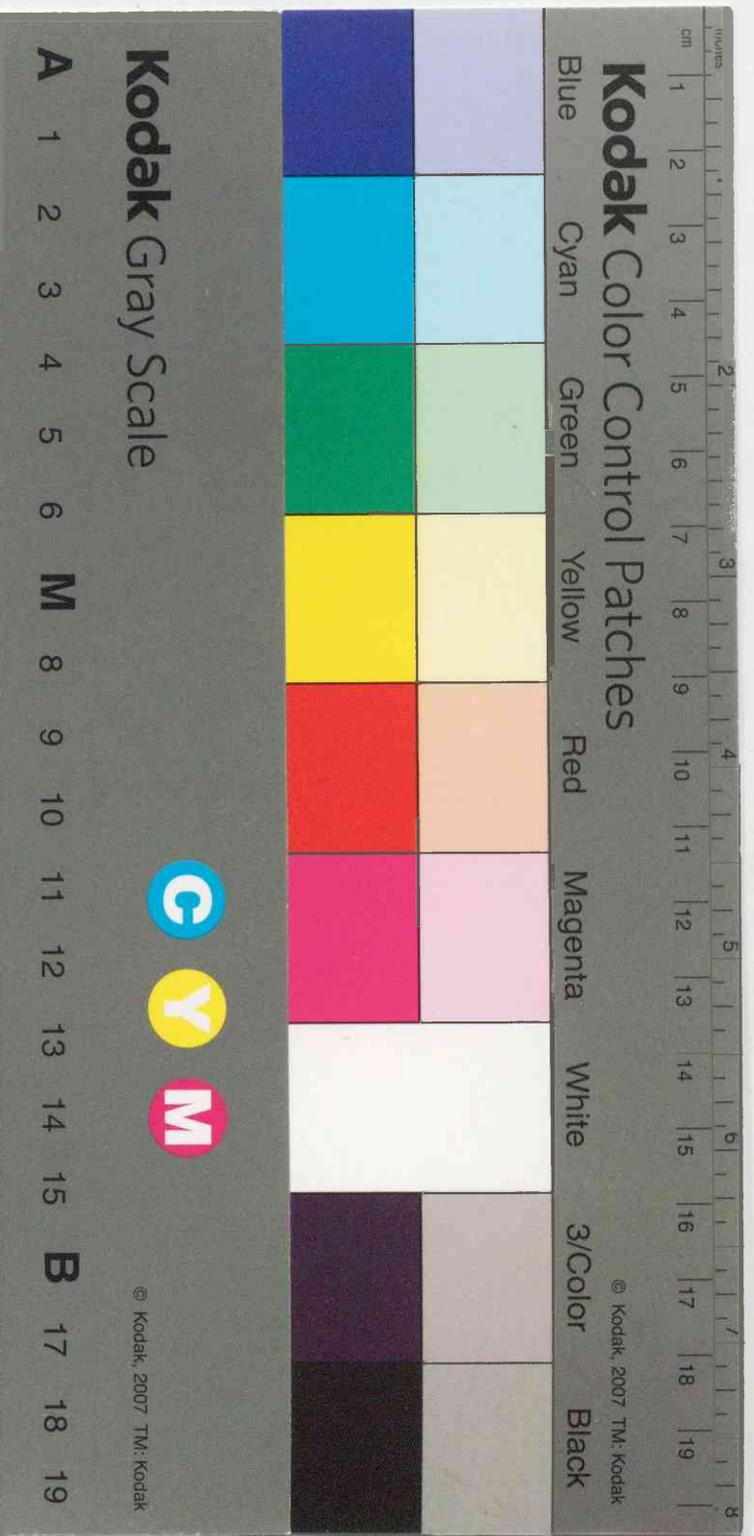




里見八太傳

第四輯

卷貳拾



Kodak Color Control Patches

Kodak Gray Scale

G Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



20

30

南總里見八犬傳第四輯卷之五

第三十九回 二箱を飲りて良傳夫妻を葬る
一葉を浮りて壯士両友を送る

文明十年戊戌の夏六月廿三日の朝、朱明は犬塚犬飼の両義六、大照文
ホと俱は犬田小文吾を自送りし門の戸を引、圖々舊の席を團坐す。
あつ骸を隠さんとして泣沈む。妙真を解つるが、業内にて辛く納戸
あり、木々る高箇の葛籠に山林夫婦の骸を精悍しく飲りて表を葬る。
包を船荷の程よく造る程、大法師と照文は入江橋のほとりより、文五共衛
舟艫を竊りて背戸川へ漕ぎ、霧あければ人あらしむ。又彼五六鹹百郎ホ
三個の悪棍の亡骸へ信乃と現八と背戸の河原へ扛りて出り、腰は鐙の石を

附く水底深く沈るよ、大へこれ中も回向して頓生菩提と念はれ入る
 有繫不便は海をく共念佛をうろどうくは程よは輝送るあ
 整ひ小天の暗うし進退既便宜をゆる入江橋のほとり成兵絶て
 舟の隙を其の領まり謀合ひ出船の儻とくと急せ妙真の
 大の親兵衛を抱たつ葛菴は添め舟は乗る信乃現八も乗りと
 板子の下は伏して下り當下蛭崎照文ハ簑笠は姿を窺へて竊は船と
 漕せバ大ハむり由り々霎時河原は目送るは送は其処と見えは
 方は是義士節婦を皇天憐れむひえ露のひめく立菴く咫尺の間心
 定りぬ彼帆大夫が遠見の兵か舟退くをありともいつてこれをあは
 船路は障るうなくく海上遙は走る程は露收りく日ハ出たり。それバとあれ
 照文ハ楫より迷へくもわくは素より安房人ありた水とくと陸より易う

市川の郷をそと吾侪の家ハ彼処とと妙真が指まあゆく船ハ門
 邊は著まける倅の便宜ハ是のなを大江屋の篙工們ハあく速く船と
 出く昨夕より一人ハ在る舟守耳のし疎く只炊とほる婆々のこれハ
 信乃現ハ後やびくく照文との小河岸は登り妙真と先は平と柁ハ
 代る両箇の葛菴とと母屋に運び入れて家廟の門よりは打居る客
 わすも慰めりく一嘆息をうろどうくあはれども妙真ハ心さかしくか
 こ子子の義烈は羞りけん復りしつに面色は奥の一室の塵を拂え
 信乃現ハこの処は潜り照文も茶と勧め膳と薦めをさし養志の叮嚀
 又服を折ハあつた家廟は對して香と焼た花と齋粥をこ子と息婦の
 後世を吊る看経の外他もあつた忘れんは生憎はその面影の目見え
 いしし胸よのこもひびき禁りて落る涙の玉匣ゆ親あつたはれどと

あやふらふに推見の母と慕ふを大人しく或は外は出門は立ち獨遊は餘念は
 鳩の車は竹馬は走り疲れ假寐の裾は衣添のぬかぬか睡顔とこれ親の
 遅くは生育も今茲も木は逢る土用央と云ふ秋の風より悲しは残る
 老の云ふをどむらうと抱に揚は夢欲現く懐へるとさし入れて萎む
 乳房と探るも哀れなりかぐとの曠昏は小文吾、大いなり行徳
 あり来まう妙真、ゆくこれとんくいと奥へ案内を信乃現八照文
 赤ハ歡びく對面し彼條の首尾と云く文五兵衛が安危を向ふ小文吾を
 密に曩の某路と急ぎく莊官檀内許赴は雷深ればも聞ぬ諸
 折戸を敲け犬塚信乃が首捕とされと報へ且と召入れ新織
 帆大夫奥ありとて夏の趣と問糾は狐疑の用心大か檀内を
 側は坐り夥兵はあて十手と把りく左右間わ捕獲をその某とひる

豫く仰を稟るる僕きのの黄昏は宿所は走り還りく果て一個の
 旅客をれりそ武士の身の中は刀瘡のあとと起居は聊不便と
 彼と賜を骨相圖とわ被きくこれ被竊は命をれば年紀より面影より被
 衣の色差もとの模様些も違はれば警者は撈りこの命を
 まいり現疑とく信乃とて極はとて氣を暗く暗く
 酒食と薦り更團臥房は溜まり只一刀は刺殺を首捕とやり廣き
 僕がよきの見も知らぬ犬塚信乃の親文五兵衛が織り
 舌藏へくわたりとて答は胡論ありハ夏は孰る先人の僻耳をい
 おれ此度の恩賞は親の總継を免をせよと彼首級と取ゆく包
 終る寄されは莊官檀内受りく実檢を備へる當下新織帆大夫ハ
 包と衣とをんがら又ち被け首級を又骨相圖は合し

忽地横身を破と拍く感をもと半响許満面は笑を含み某を招き近付
 小文吾微妙に動かし其の紛々たるわぬ信乃が首級を進りしに文五兵衛は
 料を免して汝と共に宿所は還さんれも亦遅く走りに速は辭我かたて
 直に趣を定まれば怠慢の罪をゆるぐと人々を走りて成兵を退せし
 餘のうら云云とち案しつ檀内はありをゆるぎ程に露齋と見外す
 六帆大夫は仮装して首桶を携影兵を捨て遠くかたり去りぬ父の免れを
 相伴く入江は還る小徳権謀をもとめぬ身の博の釋らるを歡ぶ氣色の
 ぬ却まらみ只ある習中まを推量れど路次めれば告ふ由りかて
 宿所かへり着る大道徳は迎らぬ子舎は圓居し身かたの事の趣
 房は義烈沼蒲が枉死及某血の奇特より大塚生の雑瘡平愈大八の
 親兵衛が玉の瘧の念玉親得而修験の本名本心迷わくは父は報か大

道徳も人々を船に乗し露と犯り市川へ遣はるるのすと告めは父ら
 づく毎上りつと驚き又下りて感は且歎涙と袖に堰くひて膝は
 流れてゆく水のえぬをを今有繫は花の心弱を今此の役は立く
 ければ汝は道徳は俱してと市川へ赴はく妙真は力を勦ね房八沼蒲が
 野邊送り今宵をあらん人葬果が汝は彼両友と潜りし船小
 乗し大塚まで送れしれ共侶を及ぶ婢兒們はのまどくは
 彼はハ入り来し親子齊一四の守の程は且怒み彼極
 元は衣を増えの家廟は橋を折添く看經しとわんを老人ゆ
 相心しつれ汝はあづと閣はとと親の意は任は彼此は
 如子孫は物大々を洗ひ流し道徳は俱して来れしと緊略を報か
 ければ人々感嘆せむ就中信乃現八の文五兵衛が無異を祝し小文吾を

芳子の大人を言葉の末も山林夫婦が死を惜むるを深かりたる
 目も妙真の涙をわきま小膝を進め喃犬田ぬい。かくい子子の志竟に空一
 片の輒く追捕の人を欺死ぬれば亡魂のまを歡しくひひらん。高工
 小文吾在ら現大人のいれ。葬の今宵か。影護り。と
 又小文吾點頭。己もまをわかれ大塚生の急難の一旦。釋れ。あま
 辭我へ遠くもあ。孫房八沼蘭が死。且く人あ。四鄰の人のり
 向。沼蘭八聊故。行徳へ遣。所要あり。鎌倉へ赴。り。と
 答。あ。月も終。なり。宵蘭を究竟。交中の頃。如此。と
 合。時刻。大法師。七骸。飲。葛菴の。退。潜。り
 世間。枕念。世や彼。郎の。母。焚。立。の
 飯も逆縁の涙。鍋。落。味噌。妹。伏。花。縁。薄。実。汁。を

又阿弥陀佛。弥陀仏。念。初夜。過ぎ。寺。の鐘。無常。示。流
 轉。の巷。煩悩。の狗。の。声。更。主。死。の海。近。れば。彼岸。の波。の音
 返。呼吸。の。徂。徂。の。人。の。迹。絶。既。時刻。あ。支。度。と
 房。八沼。蘭。が。七。骸。と。斂。や。兩。箇。の。葛。菴。小。文。吾。と。現。八。背。負。て。被。所
 盤。を。携。う。大。八。の。親。兵。衛。の。時。も。熟。信。乃。が。横。身。を。担。抱。墓。所
 供。立。ん。照。文。八。像。て。准。備。せ。單。張。燈。を。引。提。光。進。む。大。則。導。師。と
 兩。箇。の。葛。菴。の。間。に。立。け。既。背。門。口。より。送。り。送。り。難。々。妙。真。の
 洗。指。の。焼。の。を。送。り。遠。く。只。ひ。り。端。居。携。柴。垣。の。袖。涙。の。たま。ひ。川。練。の
 珠。教。唱。名。の。声。も。曇。宵。箇。の。天。斑。雜。星。影。も。定。り。世。の。哀。別。離。苦。堪。ぬ
 炎。暑。の。六。月。も。今。宵。む。り。八。肌。寒。地。風。本。來。空。水。火。滅。ん。と。又。光。に。螢。火
 と。張。燈。の。を。送。り。翔。ち。伸。あ。り。目。送。り。り。程。人。々。を

朝露碎
王豪傑
送ら侍

大去脚



大飼現八

釜崎照丈

大江親泰彌



大塚信乃

大田小文吾

阡陌を邁くと百歩許西へ入ると一町ありと陝小の岡ありけり此の処昔大江屋の
 墓所多し小文吾の墓も知れは云ふといひありしと馳せ葛籠を却せよ現八も
 ぞと卸したる葛籠の上は附より一盤を両入はよふか把とて房八が親真兵衛が
 墓の側を壤を掘起すと七八尺も穿果より當下信乃ハ推見を石の上ハ
 居措く両箇の葛籠を擡ぶは小文吾現八諸もどけく空は緑ありし
 夫婦を合葬は程ハ大法師ハ空のほり近く合掌して引導の語句を唱てとて
 諦聽諦聽四大木來空美分別泡沫與夢幻妻子猶波
 器況珍寶乎晴能隨汝者儻不破壞一團心識亦焉知
 寂滅之為至樂頌曰荷葉與花共浸影漸灑涼風蕭颯
 急催秋其氣清冽其色慘淡涅槃室中物僉休息吁得
 時哉吁得時哉即投與以下火最後之句子作麼生看

破熱池中並頭蓮分明紅爐上一點雪喝

唱うて退くと小文吾と現八再び盤をとり揚ぐ立地は埋められ信乃ハ
 と大死の石を來し推を左右の梅の核を伏せ阿伽と沃き莽草を
 挿く大八の親兵衛を第一番に推向て頭もどけく額つて小文吾次ハ
 信乃次は現八次は照文次第は焼香回向すこの時ハ稚見ハ全く睡の覺は
 けんを訝しげに左見右見る細小なるもどうち合して廻らぬ舌は念仏の南無と
 なるも彌陀頼む人おの所作を痛おられ彼をひきよめ人嘆息せむ
 中ハ扱あはせむあはれ又稚見を携る食大江屋へ入り來り背門より入りし
 程は後方遙に撞かぬ鯨音ハ四更の妙真をかく出迎へく人々を芳ひ盆は
 茶碗を並居て準備の煎茶を薦き小文吾ハ墓所の埋葬の為体と云ふと
 妙真これぞあまの子ハさへ媳婦さハ彼瀬はた義の為は

共命を預さば世の雋傑達は柩を送らざるやゆんや況祖父松平の王なり
 既なりと云えたる金碗大入の子はあま道徳より導せられ五山の衆徒を全
 賢と経痛せしむるは優べく千萬人の道俗は棺の繩を曳きしより渠亦が為目
 あり亦これのゆゑに中匠尚小く孤を孫と受け捨られど何ぞや歎き侍らんやと
 のひつても又も歎く袖は寅縁の推見とてとて取房は伴へば萌葱の樹の七布八布
 廣野も今ハ化野の中は捨る撫子の軀と睡も夜れかそ又妙真ハ舊の処はせ
 ずの故遣火焼く官待小文吾これをええの女家は甲夜もいひあてくあり
 許我へ速くわぬ斯も揃を坐ん老一其曉ゆく犬塚大飼両友と舟と
 大塚へ送るこのゆゑ父も豫くありとゆさうありも商量決着おれ
 心急だのしそくしとて妙真を寄ると名残をも惜まれ切く初七日の比也
 留も帰くても筋おれはさしゆさし夜は深なるは明果るを後殘る
 相譚交と慰れは信乃ハ現ハ共侶は妙真より對ひて此度某小也く今
 息賢母も稟る恩義ハ今さら演盡さるは後難と憚りく本意は
 故郷へ赴けどもまた故ある伯母夫許再ひこの身と寓難る只同盟の犬土大川
 莊助一字と額藏と呼しはの潜るは對面して入人の人を告ぐとの餘の
 所要も果さるゑとあ外亦他すやかれは所不定の身一旦袂を分つとも
 あも実生の犬土あり鄰郷は父田父子ありあは疎遠さるもあは嫡孫の
 為自愛しく哀戚を於揚られむと再會の時を心緒と盡せばれ
 と告り列は妙真ハ心はほけよ心とて要時頭を擧げり多當下後崎照六
 懐り準備の沙金を五包とせし先三包を扇を束るも信乃現ハ小文吾
 ちうはより近く寄る三犬士の金ハ平兩と下包と各り此些少の東西おれ
 此度の路費を資するも私私の餞別を尺里見殿の賜あり辞を納めんと

八代傳五轉卷一

山崎堂藏

一入はこれぞびとびとにけりて其ハ過世ある死同盟のまじりたる
 微志を承りしとゆふ今又何小の功ありこの賜を受らんや且大塚への道の程
 十里に足らぬ旅の暇の襪骨ハ要やと推辞ハ照文頭とち掉りあつていづれ
 本意は違へ同盟の義まうと且く微志を承りしとゆふ今又何小の功ありこの賜を受らんや且大塚への道の程
 人の親子の死のあつていづれ功ありと俟て賞を行すの傳わんや且大塚への道の程
 大塚ハ宮戸の大河を隔るの道の程遠くはとも大塚生ハ伯母夫の宿所は
 入らんとす襪骨ハ専要の某も亦旅のあれば囊中ハ貯祿の多かりぬと
 憾のとりとむるの物受られども安房は選りて君は報せざる辞もあらず
 納めおひひと頼は勧めく己が信乃現ハ小文吾ハその理りハ感服しつて
 育一思と謝しくやるるは受納めし照文ハ又下包の沙金と扇もち乗て妙真を
 招き近つて老母ハ安房ハ夫婦ハ追薦の香華の料は手親兵衛は賜りの
 辞讓ハ要のなかりし中をいふは是ハ推辞の感涙坐は禁りしりて受
 けられ退けし照文ハ又下包の沙金と扇もち乗て大塚生この下包ハ彼同盟の
 一犬士駐助とやんは届けぬ其ハ大八の親兵衛と伴や安房へ入りて後ハ又
 大塚は赴け各々と再會せんことを傳へていづれ信乃ハ感謝勝を
 遠る限の賜と推辞もハ失敬かん致さるれば彼額藏の駐助ハの席ハ
 欠らざるに死ハ冥加ハ餘り別々の賜めども其ハありしを彼友ハ分與へ
 と今もあつたの義なりハ許せしめし扇を推向く返さんとす
 急ハ推禁めく又益を口誼の俺們的に彼ハ一面識かたをいふも大士
 一々ハ六の賜ハ漏らさるべし是則ハ十一郎ハ私の計残かたを食道ハ示し合へ
 賢を招きたる微の君命ハあるのあれハ聊辭を添へるも今もあつて共侶を受
 けし林夫婦の為ハ初七日の回向もせざる他郷に赴く出家の所行ハ違はる

一犬士駐助とやんは届けぬ其ハ大八の親兵衛と伴や安房へ入りて後ハ又
 大塚は赴け各々と再會せんことを傳へていづれ信乃ハ感謝勝を
 遠る限の賜と推辞もハ失敬かん致さるれば彼額藏の駐助ハの席ハ
 欠らざるに死ハ冥加ハ餘り別々の賜めども其ハありしを彼友ハ分與へ
 と今もあつたの義なりハ許せしめし扇を推向く返さんとす
 急ハ推禁めく又益を口誼の俺們的に彼ハ一面識かたをいふも大士
 一々ハ六の賜ハ漏らさるべし是則ハ十一郎ハ私の計残かたを食道ハ示し合へ
 賢を招きたる微の君命ハあるのあれハ聊辭を添へるも今もあつて共侶を受
 けし林夫婦の為ハ初七日の回向もせざる他郷に赴く出家の所行ハ違はる

杖を駐るの速くはく再会先と云ふの終は納めぬと懸ふは諭せは信乃
 實の感佩して遠くは意は仕らうこれ彼の問答は夏の夜の短く明光と
 鐘の聲は信乃現ハ退たく行装を整へて辞別をせんとせん小文吾も亦
 此を告ぐ遠く身を起て妙真急は呼笛めく準備の割菴を遞与妙小文吾
 これを受て其ハ大塚まぐこの両支を送り届け彼大川莊助中對面を
 かりかれは西三日遅くとも四五日の程ハ必り来るべし賓客達ハあつち
 笛又妙徳へも憚り父も翌のちハ市川へ邁んといれれども妙も相彈之
 等閑かび軟待と云ふ妙真領はくもあつちゆる彼地は逗留あふ
 とも房ハ沼蒲ボが初七日の速夜の比やをわけてもこの期を推しては
 いづれもわかれはあつちのわけて後をまると回答く河岸は立出ればハ大照文も妙真
 共侶水際よ立て目送る信乃現ハ再會を契て船は乗替ればハ小文吾も

閃りとも乗く棹りのぞく推しを熱明の潮合は漕れくく船の
 迹をたどく世の中は別と云ふ牝鹿の角の束の間もか惜く脆死人のそ
 あり却説この日亭午の比は文五兵衛ハ行徳より来たり妙真をかくれんて
 ありあつちを来りしれはわあつちと真成は上座よめりては涙吐く要時ハ
 何れもはのしむむあるトハそが背向はあり頻りよ涕をうらるる客も船
 かく腰ある角を枝出し推しは胸のわたりをわたりてあつちと目と紛らせ
 とも紛れぬのハ愛惜の歎の霧の離ち憂を隠せぬもあつちとやうな
 ありけん文五兵衛ハ畳む角を側は措く喃阿懐あ向上下る房ハが
 芳かり義あり潔然今般の送言曲はせりさそりも義を竭さばとも
 世を隔る怨を執念深今さう何と云ふべきかあつちハハのあつち
 ありしもなりあつちと懸しとあつち人を追薦あつち沼蒲ボ大分

山崎堂藏

十

入受け胸の痛ふは諄々をうらひのほどよれ小文吾ハ彼面友を送りて江戸へ
 赴たらん又二丁の賓客達ハ奥ゆきをりて子舎お秋と向へ妙真涙を収て
 相宣ひひてて子どりのがうらひもいれどもあひ絶つ間おれあを又口説立く位だ
 冥土の碍りもかん犬田との今朝未明は船を彼二丁を大塚まで送り流
 遅くとおれ四五日か還らんといれりかれば後安うそい、大道徳と蟻崎ゆ、
 子舎よととつれ誘ふといひひ身と起えんといひ程は六八の親兵衛ハ外面
 より走り来く祖母もゆき物と携を推せまく六慢へ行徳ある外祖
 への事おと一は礼おしゆと頼つてもと文五兵衛ハもは引を膝まうち
 兼く大父和郎ハさき霎時足ぬ間よといひさう大人あうかりやう物取見と撥探
 物を袂裏の花黄葉田舎糕を袋の底に透与て受く戴たる伶俐めを抱抱
 掃く頬と合つ頭を拊つ愛やうと忽地よあひおんを抗うと単衣の腋間あり

牡丹は似る瘧をもく只顧感嘆もくれば妙真ハ孫ハ腰著る獲身囊の匂
 解後く彼仁の字お玉とも傍おし示はらん文五兵衛ハ遠く懐紙の間より
 眼鏡を取おつりてとちてあく感七己は現玉の瘧といひさくはと灼然之
 既よかる奇特おれハ孫ハ久後とく憑一勢失ハあやといひ玉と護身囊よ
 納めく腰に著るもく又文五兵衛ハ妙真と先立と子舎よ赴たらん大
 照文は對面して送る意を演情を説く閑談をて肅々やう大ハ昨夕三
 犬士と竊ハ山林夫婦が柩を岡へ送りて埋葬一為林及犬田大江の男甥ハ
 犬塚大飼ハ等しく里見家ハ過世ある偉の趣とて示せ照文ハ亦来
 意を告ぐ賢を招た士を徴ゆる君命を述傳り又のりかれば此度某ハ四大
 士を相伴く安房へ還えといひりて彼大川莊助とて一犬士今ハ武藏の大塚ハ
 おれハ同盟全うはと大塚大飼犬田ハ且く徹お心せざれば里見殿の家臣とて

文五兵衛も妙真もいり心りぬれり。○大照文も相憚り時七月端の二日、大を

きのあり行徳あり朝と起る文五兵衛のあつれつくと思惟。○大照文は

信乃の故郷へ赴死し伯母夫許身を寓し云云といひその親族の憑りぬれ

謀のむ彼村雨の力を奪り賺して許我遣るにわかれあれらの嫌疑あはれ

亦犬塚が久恋の地にあつた只その友と貞實の婦はまう入るを報をさひ

のまう人送めぬや小文吾をけふまふかへぬ其処は不測の事あはれ

墓六が小廝の額藏の莊助を竊訪立地との消息をひては従はれぬ

あくとも房八夫婦の初七を果さば大塚は赴死す彼大川莊助は潜るは對面と

年来の行脚の趣意を告ぐ里見殿の家臣も死契約をせんともいふ

邁る翌の夜小文吾を病むる人頭を病むる人頭を病むる人頭を病むる

刑談の程は打し市川が横崎照文もあつた船へ刑室は迎入れて大法師共

件の趣を告ぐ大照文も亦法に法師彼地は赴死ありこれなりは便宜か其

今朝もよめるもさうとを相憚り親共衛が二親の初七日もを果

よ果るがくもあつた安房へ候と打ち妙真もあつた勸め

や兼引く物も小文吾のあつた縁この一條を事整むるを法師は秋

厭はれ被地へ邁んとつてよ日よりの鬱胸を印し足れり秋は

稱賛をりるが文五兵衛の外はゆる便船を求るは味のは出船あり

大照文は酒食を羞めく款待を程よめその時刻あり大は行装を

整へて遠くへあつた文五兵衛も照文も後を跟先は立入江の船場を送り

よの波もかす日也翌と哭りて秋をさあぬかす大照文はあつたのの趣

木魚の音も時短くも絶間なく積り功徳高き山の石を打たれりとの末に比次
 横目影背門の槐は秋蟬のありて戸を暑くする浩処は祝言高く阿懐久しう値
 たりを呼びけり背門よりまゐり妙真誰と志す木魚を遣り珠数を收め
 身を起こすと程はあわおれり縁頬の簀戸は會釋もあつて走り
 破と推開くと驚たけりええればと人此年の齡五十七ありやかたう人眼圓鼻大
 頬骨高く脣厚く板齒一枚脱すと臘石をく補けり皮膚ハ亦黒く
 秋加子の如く鬚鬚ハ半白く老冬瓜に似り黄庚木辭の単衣ハ肩と腰と
 汗深く申の時よりりり小犢鼻禪の衣をこれとありし顯りく片
 端打せし裾も下さば四空柱は身を倚り己が隨ひ高胡床辺の團扇を
 扇かき白より揚ぐ衣領と推披き暑しくとうの扇げに戦く胸毛の熊か
 似く花繡文月輪袂傘と書し瘦肩は掛るも拭左は搦て臆の下おこ

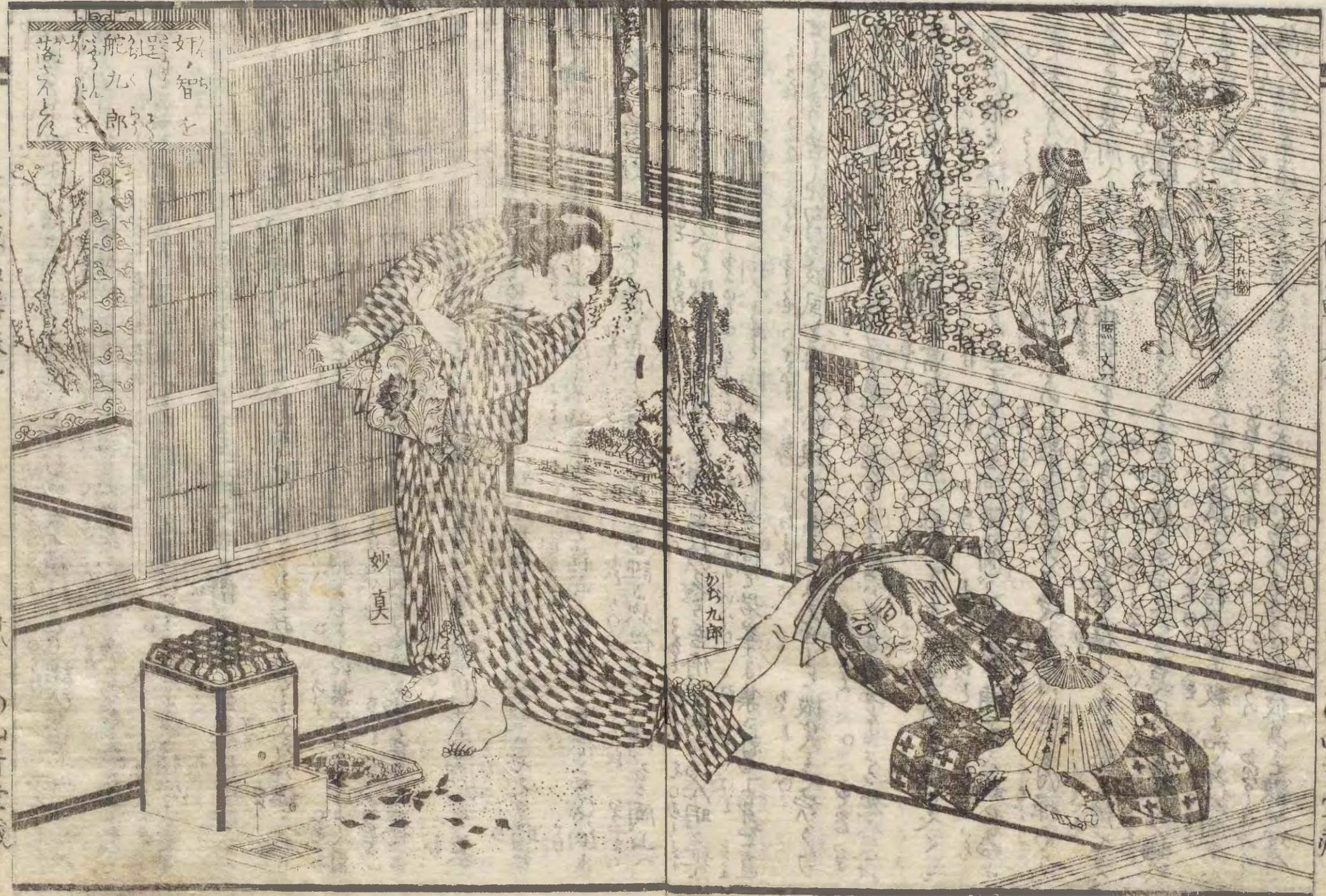
流る汗を頤搦けり拭ひりり是土地は名々暴風の船九郎と云れ
 る宿も定ぬ彼此は身を備へて船を漕げし酒と賭博の耽り馮訂の癖者
 わどありたる曩まこの大江屋も高工の冬に死折り備へて船を遣せし船
 荷を完糶減せしありぬ風吹ありし八房ハも腹をたたく罵り懲りし
 介後ハ寄つげりし今ゆりり事なれ妙真ハありしをたたく罵り懲りし
 面色して背門より奥まで進くと呼門ありし人誰かんと訝りし
 居起す途を漸りし船九郎とありしをたたく罵り懲りし
 中んと空若れし此も羞れしと懺悔ありし錢がたれ洒落せし濱邊の貝子
 劣れし風は吹れり事なれありし波は接れり寄るもありし日殿計の奴原が
 媚を説告ありしんあのみ多し罵られり安否も問はれり事なれありし
 かくわれ奮然刺染と今ゆりし事なれありし氣も持りし事なれありし

けふ訪人異邁人とあひて人まきけが哥々、鎌倉へ赴けり。あつ月より今も還る。
 娘、河に果て返れり。とてあつ解せぬ。故あつ。ゆゑとて又、他の疝氣を
 頭痛、患ひぬ。とてあつ。案、ゆゑ、灰、まき、とてあつ。又、あつ。物、あり、是、う
 勘で附く。これ、あつ。近、属、法師、と、武士、と、或、一、宿、或、二、宿、送、代、は、還、道、せ、り、これ、で
 中、あつ。云、と、疾、視、眼、違、が、れ、ど、人、の、謗、評、を、是、く、も、あ、つ。か、る、時、を、馴、染、申、せ
 ぬ、何、状、に、阿、懐、の、返、答、せ、り、あ、つ。仇、あ、つ。と、あ、つ。程、よ、く、八、箇、宅、の
 篙、工、們、も、出、舟、は、就、き、み、か、在、る、彼、客、も、あ、つ。ゆゑ、と、あ、つ。告、る、あ、つ。ハ
 氣、の、毒、あ、つ。推、掛、相、談、人、は、ま、ま、あ、つ。背、門、の、又、隣、は、故、り、來、歷、序、詞、を
 ま、か、の、如、後、段、は、あ、つ。長、う、る、間、近、く、あ、つ。ゆゑ、又、問、は、れ、り、あ、つ。ゆゑ、の、と
 あ、つ。と、押、さ、げ、は、席、薦、敲、ら、り、招、く、言葉、の、端、は、伎、倆、あ、つ。と、猜、考、妙、真、ハ
 る、あ、つ。騒、く、曾、月、を、鎮、り、す、て、あ、つ。油、斷、炭、と、あ、つ。心、つ、れ、り、志、ハ、大、き、く、あ、つ。

けふも疑之の筋か、んや房が鎌倉へ赴けり。八人みかきり沼浦と行徳へ
 遣せり。初媒妁せり。一人の去歳の秋身あつ。今茲又その後家との長病
 著り取らうと告られ。さうも措れどを看とて、先、あ、つ。を、彼、か、へ、と、遣、り、れ
 又彼、兩個の旅人、原、古、那、屋、の、客、か、れ、り、又、房、ハ、中、疎、く、後、渠、が、還、る、を、あ、つ。
 あ、つ。あ、へ、も、本、あ、つ。道、遠、な、れ、日、の、暮、て、か、ま、遅、き、折、ハ、宿、を、あ、つ。ゆゑ、
 や、へ、と、あ、つ。果、は、膝、突、詰、く、否、宣、わ、か、悪、し、あ、つ。情、由、ハ、大、抵、猜、し、り、あ、つ。ゆゑ、
 と、あ、つ。脱、ぎ、る、檜、垣、の、媼、が、妙、も、あ、つ。あ、つ。四、十、あ、つ。と、あ、つ。根、か、つ。の、縹、致、の、捷
 色、く、あ、つ。あ、つ。脱、ぎ、み、つ、く、米、の、仙、人、ハ、剛、窺、く、と、あ、つ。雲、の、歩、板、と、踏、射、り、く、あ、つ。
 浴、女、房、感、り、せ、り、と、あ、つ。年、來、寡、居、の、枕、寂、く、不、圖、せ、り、あ、つ。心、も、あ、つ。感、ひ、海、に
 何、が、寺、の、色、界、杖、尚、或、ハ、連、歌、ハ、香、立、花、ハ、蹟、美、更、ハ、趣、あ、つ。鏡、ハ、武、士、の、浮、浪、人、一、個、
 二、個、も、密、夫、の、あ、つ。澄、扱、あり、色、ハ、惑、へ、子、也、も、昔、物、結、り、あ、つ。不、便、ハ

哥々殺れり。欲第一番疑はれし墓所の岡には新し物を奪り跡あり。され
 どもあつた猫でも死すと云ふもの。只房八鎌倉沼南八里と云ふ所の鎌倉八
 舟遠がこれ。日毎は行徳へおれり。古那屋も又煤人の宿所。娘は居ると
 えしと云ふ。や彼岡の新墓。哥々夫婦はわかれ。人隠しと埋めると。其譯
 あり。はや。あつたものを怪しむ。人の噂は。古那屋で。大塚もい
 罪人は宿する科あり。あつた。文五兵衛八搦捕られ。その子。小文吾。働は。彼
 大塚。首捕。許我の使。進りの親。年々。免れ。その日。小文吾を
 地。おれ。家。又。吾。侍。豫。疎。ぬ。盛。濱。の。賊。四。郎。と。殺。り。均。太。の。三。人
 之。比。り。し。往。方。死。せ。と。い。ひ。ぬ。疑。心。か。れ。岡。に。埋。め。八。彼。大。塚。が。七。骸。は
 山。林。と。大。田。が。竊。謀。合。し。賊。四。郎。と。殺。り。る。七。骸。と。埋。め
 有。繫。は。後。お。ね。且。く。影。を。隠。せ。狄。斯。送。り。勘。詰。る。事。は。い。は
 違。え。り。八。と。衆。人。と。欺。く。と。蛇。の。道。を。變。へ。お。れ。の。心。吾。侍。と。欺。り。人。明。之。地。

ら。お。れ。八。彼。新。墓。八。何。人。と。詰。問。れ。七。妙。真。何。と。若。峯。集。る。鷲。身。を。直
 せ。免。り。苦。し。地。骨。の。破。風。を。再。び。鎮。め。氣。色。は。又。せ。と。微。笑。し。て。笑。う。け
 八。邪。情。を。九。生。と。活。物。子。を。慈。心。を。と。警。色。は。惑。を。も。つ。悪。人。八。此
 世。は。又。あ。つ。く。も。い。は。れ。一。箇。も。當。ら。ぬ。事。を。疑。れ。て。八。あ。つ。く。も。い。は。れ。隠。し。て。く
 八。八。彼。大。塚。信。乃。と。申。人。己。と。い。は。れ。阿。沼。南。が。兄。の。懸。捕。を。八。親。の。為。に
 して。素。り。怨。め。の。か。け。切。く。七。骸。を。葬。ら。ん。と。及。ぶ。行。徳。八。行。禪。あり
 八。の。墓。所。へ。い。は。れ。と。推。辞。れ。と。房。八。が。意。は。任。し。う。り。れ。ぬ。絶。て。ん
 八。ぬ。罪。人。の。軀。を。埋。め。せ。し。と。云。ふ。慈。悲。貌。云。云。と。人。は。告。ぐ。死。す。と。い。ひ。晒。す
 八。と。拍。く。胸。の。傾。け。り。ち。笑。ひ。あ。つ。た。と。い。は。れ。信。乃。を。教。え。加。え。問。は
 八。落。て。話。す。は。落。ち。り。あ。つ。く。も。い。は。れ。犬。田。が。仏。あり。と。云。ふ。彼。れ。七。骸。を。埋。め



好智
九郎
落

妙真

九郎

九郎

大傳五郎卷一

八二屏口屏卷一

十八

山崎堂

山崎堂

欲するとも所は八幡の相撲あり恨を合む妹夫頼れしを諾ひし件のついで
 連り六月廿二日の鎌倉某崎中へ山林が犬田と出會の相擇ハ誰とあふぬのこかし
 余を云云といひつゝハ言の後先取次あるの偽りありはれぬとれより猪ひふ文書
 あの哥々を殺して逐電せしあはれかそこの親文吾共衛下竊し金銀を和解せん
 身ハふ子の亡骸を阿容くといふ人あはれせは葬らるあはれんぞんが想ふべし
 女ありて朔日あり月大のみを夫ととり替り替飽まはあはれせとせよ入目
 ちうまの念佛三昧も柳の喫論より燈は彼新菜と霞と目物を見んと立揚る
 裳を楚とも笛も且候まのいふあり彼新塚ハ誰かともその職役はあはれしと墓
 所を遺るハ不法か人その才預るとかぬも捨て措けしとあはれしと晴と
 睨之継りの後中へはも正しく忍し不敵の悪事と社官殿はけり賞祿も酒も
 酒飲めは室の山へ入りあはれしと空しく帰らんや送は証る欺偽は一跨る岡山へ

引りての行く面前は明々黎々を分てん運の際を覚期とせよとるりつる物
 知しあはれしと心もあはれしと身もあはれしと人仇もあはれしと嚮しあはれしとあはれしと人日
 つまの地密夫と引へえあり再婚を招きしとる婿殿ハ外かた恥ぢあつこの鼻
 年程も十ハ登り足錢をゆゑの健中へ船もく漕ぐ小口も利く酒ハ喫ども睡
 上戸知れ物押ひをぬ柔和の女房の尻は布ハ敷け辛防つる九年の功龜の甲
 ちハ八卦むをときのみ堤の賣トハ生利とんをせし女房を下し置ぬと地天泰
 ちく大吉かり身上ハ些劣れども里やを友達夥あり山林が養父とあはれしとあはれしと
 けり死のあはれしと今立地ハ絶更くその商量ハ乗らんとかハ竊ハ岡へ埋やる
 ちと骸ハ推おもあれ人あはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしと
 ちんや不番とハ冥罰觀面莊官殿はけり守へ牽しと密夫共侶獄舎を鬻
 ちゆぢも否とも忠ともいふあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしと
 ちゆぢも否とも忠ともいふあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしと

加の色好も憎さも憎し腹きりしつ不意に玉を汗の千々心と推く
 暴立まじりの破れかんとあひえくさる氣なく墓所のより憚り心
 ありあけの心と数かぬ花もかたどさたりよぬれかばともかくも
 ぬれども。まればはやくと老るも浮氣ハ男の癖ある苟且よりのいさ
 実るとあやに雨の中を雪もかひ一夜の情深草の例は做すもあな
 ひつと月を累ねくおんがの愛はめとく足定ま後かぬ悔れすの多
 日と連の月を累ねくおんがの愛はめとく足定ま後かぬ悔れすの多
 べいぞろろ昔より吾侪は浮るるもあなれが婦婦はやくも狼がりき濡衣
 被せられぬ何認めそん男の云云といひハよ限りぬ恨もかくも
 ぬれ捨てぬとあふ又日を隔て来ぬ只今志と志は亦理りも信は
 写とバ笑ふ冷笑ひ一寸延も尋とらんかぬ成ぬでも口賢まひ
 とくともさ後さる恋あわぬ否と志と地獄極楽岡の死人と垣かぬ野の

人を浮きももの言ハ只一言否か否でもありあつて岡へと又立あつと邊
 推禁もともあつて性急之介の志欲をこれハ亦これハ亦と之惑ハ此方へ
 向くと引かぬ携り振解れ久潜りて逃ればあつて追責縁れぬ見まも
 ぬれ折るは蜚崎上郎照文ハ文五兵衛を相伴り行徳ありかへりま背
 入んとは程は裡面は六人の挑むぞ踏鳴らし篋子の響は作麼何ゆごと
 先よ進もて庖福のうさり衝と入る不舵九郎ハ妙真は携著人と追遠し卻舎を
 拍も照文は忽地礮と突當り勢ひわたりて倒れ身と轉し倒れ妙真ハ
 照文の丸りまらふわつては折中を蜚崎やと以間ハ舵九郎ハ執與と走
 照文を向うとさびむお驚れお無遠慮あり奴りもあつて成人と登り松蔭の腰を
 折るまでとさ投ハ後家の密夫狄穿鑿せぬわつては社官并引摺邁と
 この返報を借とせしとくく牙中と立蒐る腕とすと會浩と撞と投る修煉の巻法

縁類の簀戸打倒し、遙は庭の中央へ筋斗をくわき疼し痛しと倒る羅漢
 杉は携りて身を起し、歌をくもあがれ恨しげなをく、鉦刀武士奴
 を海をく偶怪我の功名で汝が巻法の捷し、中流はをく投られ、是をく
 膝も損利ねれども炎へと裳を寒く尻推向う、ち敲け、照文怒て、懲り
 女あどと悔り、狼藉は、ゆ、某とて密夫と罵り、何ぞを再そ、尾陋の
 雑言今、許し、其れを退れ、と、敷圍を、刀を、見、引、抜、け、妙、真、吐、嗟、と
 推禁め、渠、名、を、悪、棍、の、傷、け、を、お、つ、人、鄙、語、よ、を、見、は、棒、打、
 敵、も、あ、た、死、ぬ、は、侍、は、逃、が、脱、し、ぬ、と、煉、れ、く、照、文、ハ、齒、を、切、り、疾、視、う、
 船九郎、ハ、さ、し、を、と、う、つ、く、呵、々、と、冷、笑、ひ、刀、を、抜、く、威、し、も、人、を、殺、せ、ハ、身、も、秒、と、
 有、撃、し、命、ハ、惜、り、な、く、砍、ら、ぬ、刺、せ、や、い、お、ぬ、その、鉦、刀、を、骨、の、お、暴、風、あ、ハ、
 砍、ら、ぬ、ハ、砍、ら、ぬ、ハ、暇、と、お、う、と、猶、豫、し、誇、り、擬、廣、言、わ、ら、は、粘、り、衣、の、土、と、
 拂、ひ、く、櫓、の、草、履、を、取、り、足、を、あ、罵、ま、か、り、也、去、り、當、下、照、文、ハ、刀、を、収、め、
 煩、り、背、門、の、く、を、と、ん、と、ん、と、彼、悪、棍、ハ、影、を、脱、し、隙、を、あ、つ、り、ハ、僅、小、お、ぬ、
 又、舊、の、席、を、お、り、著、く、程、次、の、間、に、立、在、て、件、の、為、体、を、胸、窺、り、文、五、兵、衛、ハ、進、入、
 照、文、と、共、に、妙、真、ハ、事、の、本、末、を、告、げ、ハ、妙、真、ハ、倒、れ、る、簀、戸、を、遠、く、推、立、て、さ、
 船九郎、ハ、狼、藉、を、渠、ガ、邪、猜、の、條、に、い、れ、し、ハ、云、を、潜、り、報、を、お、ん、兩、人、齊、
 敬、馬、を、介、り、又、禍、の、の、り、起、り、緒、を、も、つ、を、を、額、を、聚、り、俱、し、思、ひ、を、疑、
 照、文、ハ、後、悔、の、巻、を、捺、り、と、嗟、嘆、し、り、の、趣、を、お、も、知、ら、ぬ、彼、悪、棍、と、擊、つ、て、櫓、の、
 根、を、斬、り、し、ハ、既、に、彼、奴、を、走、り、し、ハ、且、も、躊、躇、あ、ら、ぬ、又、つ、つ、つ、故、が、と、の、お、
 船九郎、ハ、告、訴、を、し、ハ、彼、岡、を、新、墓、を、設、け、り、わ、り、と、山、林、が、亡、骸、ハ、首、お、ぬ、
 信、乃、が、軀、と、い、り、の、お、し、ハ、夫、婦、合、葬、を、し、り、の、妻、の、亡、骸、ハ、陳、は、し、
 これ、お、ぬ、穿、鑿、を、し、ハ、彼、身、の、の、ま、露、頭、を、は、放、料、し、し、の、お、破、れ、

此の物語は、八代将軍の御代に、
 船九郎と云ふ御侍が、
 妙真と云ふ御侍と、
 照文と云ふ御侍と、
 狼藉を、
 邪猜の條に、
 倒れる簀戸を、
 遠く推立て、
 根を斬り、
 既にして、
 彼奴を走り、
 且も躊躇、
 あらず、
 又つ、
 つ、
 つ、
 故が、
 との、
 お、
 船九郎、
 ハ、
 告訴、
 を、
 し、
 ハ、
 彼、
 岡、
 を、
 新、
 墓、
 を、
 設、
 け、
 り、
 わ、
 り、
 と、
 山、
 林、
 が、
 亡、
 骸、
 ハ、
 首、
 お、
 ぬ、
 信、
 乃、
 が、
 軀、
 と、
 い、
 り、
 の、
 お、
 し、
 ハ、
 夫、
 婦、
 合、
 葬、
 を、
 し、
 り、
 の、
 妻、
 の、
 亡、
 骸、
 ハ、
 陳、
 は、
 し、
 此、
 の、
 破、
 れ、

又いへ今宵の出船は乗走り分は翌ハ早且之大塚へ到らん易くんこの條の
 趣と大と興大は報知して文進退便宜とゆへハ皆伴ゆく安房へ來の老母ハ
 某ハ孫と背負ゆく郡堺まで送るや阿懐は急るも慌く物を取送る
 と心とつれハ妙真も遂は後ハ様ゆく睡覺る推見は新に衣被も更く
 獲身袋とを伴腰は楚と著るくも身も衣も更く衣も更く
 整つ貯祿の沙金をどハ財布の傍は身は著て家廟の位牌古記舊録孫ハ
 被替の衣をも遠くく集りて下祇は包も有り照文ハ水行も便も
 及ども順風かぬ心は任は只共走り走えとゆへこれ彼を急に程
 きのみ江戸まで船をせし依介とあふ小廝の只一個かり其の妙真が膝
 促装ももろくもあは死へ邁せんと討けは客を妙真ハ曲は報じの
 登崎ハ大八と云云の処までおくと宣は釋はめを任して
 遣えくわは行徳の外祖の途を背負ゆんともかへもを
 ともかへ心りともは吾侍も共信中とあは後者おれをいへん今還り奉
 めのとも遣は心かは似れど些の祇包ありともあはもをゆゆゆと
 依介一残は及ぶぞともを易にたまるハ一日船を漕走りとも足ハ疲ると
 かたは今かへりとも何うあへん何処までも俱へて快く諾ひる心ぬの薄朴
 勇主の為は旁を厭む他ハ高エホと智也かねばとも件の祇包と申結ゆ
 負ゆあく草鞋の紐を掃びく文五兵衛ハ大八の親兵衛を背負ひぬ
 苗守や彼耳疎地老婆をい送せとも有繫は名残ハ惜く笠は杖とも
 あはびは支度や初く整へて照文と先は立く金共信は背門よりゆへ人面と

又いへ今宵の出船は乗走り分は翌ハ早且之大塚へ到らん易くんこの條の
 趣と大と興大は報知して文進退便宜とゆへハ皆伴ゆく安房へ來の老母ハ
 某ハ孫と背負ゆく郡堺まで送るや阿懐は急るも慌く物を取送る
 と心とつれハ妙真も遂は後ハ様ゆく睡覺る推見は新に衣被も更く
 獲身袋とを伴腰は楚と著るくも身も衣も更く衣も更く
 整つ貯祿の沙金をどハ財布の傍は身は著て家廟の位牌古記舊録孫ハ
 被替の衣をも遠くく集りて下祇は包も有り照文ハ水行も便も
 及ども順風かぬ心は任は只共走り走えとゆへこれ彼を急に程
 きのみ江戸まで船をせし依介とあふ小廝の只一個かり其の妙真が膝
 促装ももろくもあは死へ邁せんと討けは客を妙真ハ曲は報じの
 登崎ハ大八と云云の処までおくと宣は釋はめを任して
 遣えくわは行徳の外祖の途を背負ゆんともかへもを
 ともかへ心りともは吾侍も共信中とあは後者おれをいへん今還り奉
 めのとも遣は心かは似れど些の祇包ありともあはもをゆゆゆと
 依介一残は及ぶぞともを易にたまるハ一日船を漕走りとも足ハ疲ると
 かたは今かへりとも何うあへん何処までも俱へて快く諾ひる心ぬの薄朴
 勇主の為は旁を厭む他ハ高エホと智也かねばとも件の祇包と申結ゆ
 負ゆあく草鞋の紐を掃びく文五兵衛ハ大八の親兵衛を背負ひぬ
 苗守や彼耳疎地老婆をい送せとも有繫は名残ハ惜く笠は杖とも
 あはびは支度や初く整へて照文と先は立く金共信は背門よりゆへ人面と

つぎとて笠あう傾けく間道より進む程は落日暉々と野禽飛べと急こ
 袂は笛の風八昼の秋暑は似てふあはれ急くとを足弱の動もれば後を
 待つ子と又走る市川の町を離れて田舎路と上總のくえ並松原をまよこれハ
 処々延繋る茅萱の下は集く虫の声をうらぐ暮初く日没ありなりる
 浩処は前面より下叢藜地松蔭より顯れゆる一個の癖者頭は拭の糾鉢巻
 と腰は二口の短刀を跨右は八九尺の長權を扱て柳色保の筒腰被の丹藏
 煩あり諸角相する單衣の両袖と前は締く毛膺陽著は衣の衿と片端
 折せ躬割の打扮髪ハ皓く面ハ赤淫めく山稜の暴らうとく骨を太く
 膚ハ黒斑めく周西の崇るは似く大道ハ陝と立塞ととをれば是別人を
 怒れば舟を覆し又屋をも倒をもみ現暴風の名の如く船九郎あを有る
 當下暴風船九郎ハ持く權を取直して横へつ又推立く酒氣分たつ

声高きうをぞれ賊奴輩遅くも汝ハ既ハ悪事の嵐房をこれハ覗まれ詰
 られく後家共侶は逐電状かあせしと猜せく殿計の甲乙馳催して門ハ
 狗を附おだの途ハ視法師と立置て夜行とける路脈をこの海道と顯著て
 先ハ輪く張る綱は宿栖迷ひの旅鳥捕へく絞るは隙費ら脱れくしと
 観念く女と速与してく死の逃とをのぞく遣とんやと句句は噎咽て疾視
 うり照文これをぞあへん先度ハ懲ぬ不敵の悪棍今笛の根を斬てハ地方は
 愚と何時ハ除ん刀を穢をハ惜れども望は任く先物見せんと敦圍猛く對ひ
 進んて刃を見りと引技けハ船九郎ハ声より立く衆皆出せと呼はあぞあめ始るこ
 左右あり高萱の中小松の蔭より或ハ三人或ハ五人折權大魚刀を引提る
 夥の悪黨簇々と各蟲のごく蹴ゆく照文ハを攬筆く撃仆んと競ハ莖
 とハ照文ハ些々擬淺とハ前後左右より引附く面ハやハ戦やうその間ハ





諸善館阮
衆悪
途小起

かた九郎

親兵衛

照文

文五兵衛

坊真

八ノ二ノ工轉

山清堂

關東の裕小
児と罵りて
餓鬼と云ふ
この食を求む
そのやむ時
おぼろしく
なり。

おれバ坊中と陽射しと覗のく横と路を下町あり走るあ人妙真も
稍身と起しとわや道通と慕ふを船九郎ハええの朽樹の株尻うち
ひく腕腋抱き一稚児と弄玉のく投揚と地上へ墮とち落せ息絶
べく天叫ぶ声とよきの薄月夜妙真ハ轉つ轉つ喘々近づく船九郎ハ
稚児と又引く動せ尻尻且且これとんよ已があらは後をこの餓鬼ハ
今寂滅為樂又同行の三人ハ腹計の教輩ハ任用しハ人ハ活てハ之
へ岡へ埋り死人の塚起も枝も此のく今一期を憑とわ
市川へ舟還り今宵を二世のみをえあつて餓鬼も下ハ措を阿乳母
日傘で饅頭の皮を刺し榮曜の表盛否とハこの細鱗を肉齧め
酒をまゐらありと決め心とせよ心とせよハこの餓鬼と云ふ應の石を搥
合々胸前に振揚れば妙真ハ吐唾と云ふ目眩とありいけいけ

おろよ声おど禁んは腰ハ小草の上より投と共死んと泣沈む
かろ程は照文ハ廿餘名の悪黨を八方へ散散と文五兵衛共侶ハ妙真ハ
方を索めと梢の処へ走の打ち雲間と漏る月影は過るれハ妙真ハ
道次ハ伏せたり船九郎ハ推仰向る稚児を左に押へ右に石を搥合の今
打とゆり揚る西人有一駭に怒るや等霎時と叫被つ僅に走り進つて
人保を取られ又つらと見え走つて切り巻を捺りと瞬も疾視する
船九郎も亦これとんと頭を拳口と開けと轉がらうとあ笑ひ故小西人
死まぬ一歩も進つてこの石とく餓鬼双と單懸尻尻ハ啼泣とあつて
雲の天幕草木ハ藏棚かくも野曠地句欄や看官ハ栄切とあめいふ
あまのうらもと種や打挫ん杖杖打く結果人欲望は任せんといふ
飽あてあて弄べとも照文ハ文五兵衛も透わ親兵衛を極む人とあめいふ

船九郎が
層敷とく
をたのむ
神一犬
士を隠す

依女

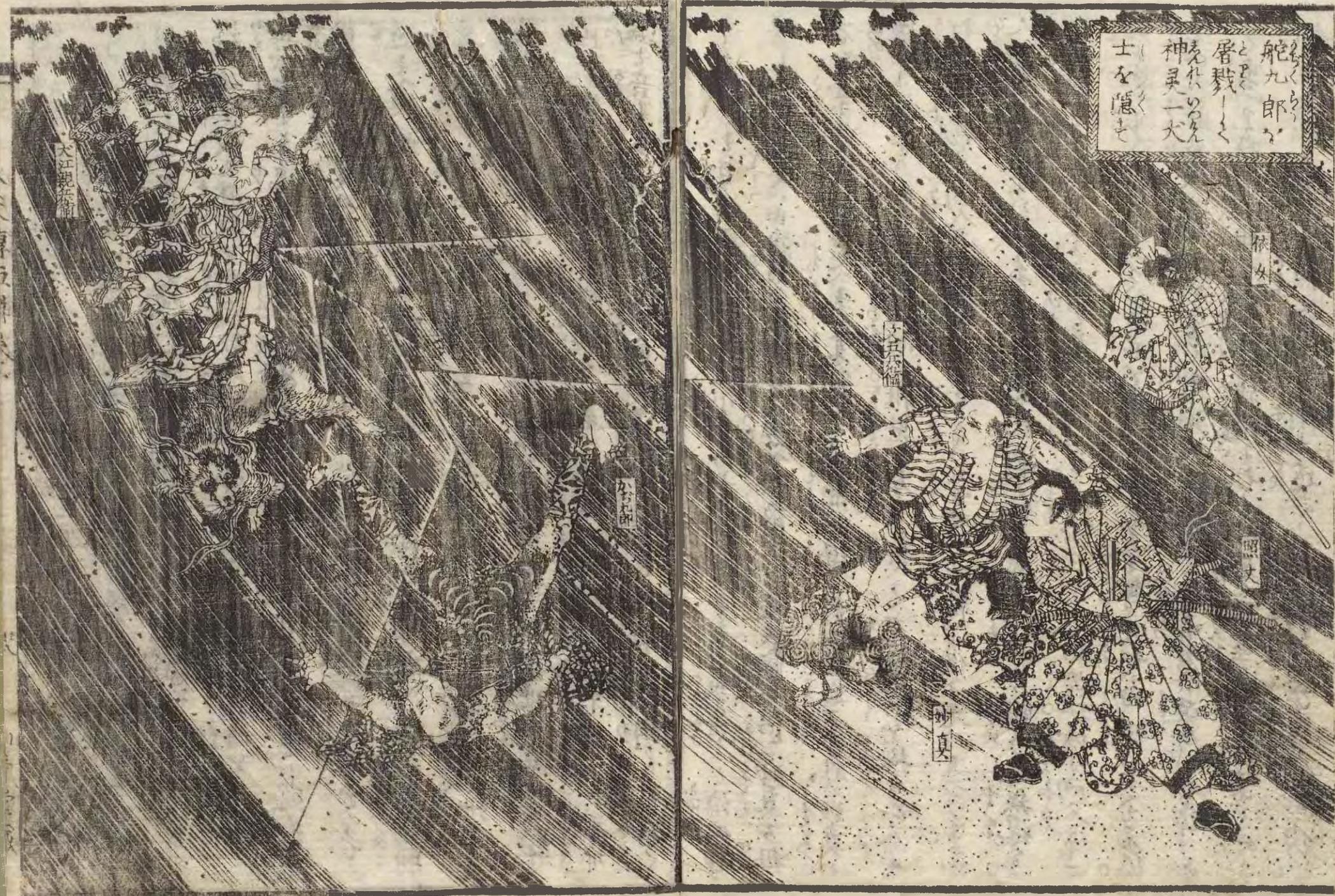
照丈

五右衛門

妙真

公右衛門

大江親左衛門



用ひ言葉とあるべし。合さばも神の感応其助を黙禱し、怒を忍び心を苦
 しめ立並ひ、目成る間四五十歩は過さる。船九郎は既に斯海傲る残忍不敵の
 奥を乗し、早更撃つ。又呵々と冷笑ひ、揃ひよまひ、膏靡む。汝も兩人を死
 ねば後家奴も珠敷と断く。かん。餓鬼奴を料理せん。卷の刃をさへ、又よこ
 再び石をも揚ぎ、妙真は只よと抗く。あれよくと哭叫ぶ。声、龜悲、火、危體
 絶命。照文も文武兵衛も今、忍ぶが忍れむ。小兒を撃つ。答の大刀、雙言をのぞく
 逃走。火、乾竹、削まぬ。入、刀の鞘もさみく。走り、進ん。程、船九郎、
 會ふ。石を閃く。推兒の胸と撞く。撃ん。ひら。あつ。ど。巻、狂、地上を
 破る。拍く。且、怪。目、瞞。壑、粉、よ。かれ。復、ゆ。揚。腕、忽、地、麻、痺。これ、や
 あ、火、惘、然。頂、上、は、駿、馳。と、一、衆、の、靄、雲、天、引、降。電、光、凄、しく、風、亦
 颯と音し。石を巻け。沙と飛く。草木を靡く。鳴動も、或、明く。或、暗く。

雲ハ漸々降る。大八の親兵衛と引包む。をえ。う。中、天、へ、巻、登、れ、が
 船九郎は、復々驚れ。睜る。両手を抗ぐ。か。雅見を遣う。を。跳、狂、め、
 撲地と。輾、バ、足、を、さ。あ。わ。り、く。列、ハ、地、を、た。れ。雲、の、中、は、物、あ、り、く。倒、し、引、揚、が
 ぐ。鮮、血、濃、と、雷、り、く。船九郎ハ、鷹、より、鳩、尾、の、邊、を、ぐ。を、を、と、引、裂、れ、る。
 船、控、と、落、さ、け、り。奇、持、は、照、文、も、文、五、兵、衛、も、進、ま、り、く。忙、然、と、後、方、を、り。
 嚮、は、逃、る。惡、黨、四、五、人、が、舟、朽、た、り、に、あ、ひ、ん。船、楫、楫、藻、川、鎌、を、あ、く。志、色
 物、を、閃、く。不、意、に、起、る。驟、ん、と、進、む。を、照、文、を、く。え、く。え、く。大、刀、真、額、を
 後、鬚、一、縱、横、盪、礙、は、破、立、れ、文、五、兵、衛、も、相、並、り、再、び、刀、を、う、ち、振、り、く。兩、人
 再、一、向、敵、を、瞬、間、は、砍、切、只、残、る。奴、原、舌、を、掉、く。刃、を、引、く。逃、ま、る。を、三、支、許
 追、捨、て、舊、の、処、に、立、之、れ。風、を、さ、り、雲、霧、を、傾、沈、む。五、日、の、月、の、影、の、と、出、し、送、り、を、
 里、見、八、犬、傳、第、四、輯、卷、之、五、終、

編述

曲亭馬琴稿本



浄書

千形仲道騰寫

繡像画工

柳川重信



剞劂

中村喜作刊刻

家傳神女湯

一包 婦人諸病の第一神薬 産後ちのそり小姑あり又ちちのそり小姑あり

精製奇應丸

一包 遠く〇大包三百粒餘代 袋中包三六粒代を五下小包十粒代五分

婦人つら島妙藥

一包 婦人つら島の正まあるをえり製方秘傳の加けんをつくりをえり

熊膽黒九子

一包 けいどのつくまのつら島の正まあるをえり製方秘傳の加けんをつくりをえり

製薬并弘所

江戸元飯田町中坂下南側四方ふと高 神田明神下山本町筋同明所東新道

瀧澤氏



取次所 江戸芝神明前のつら島市三番〇大坂心井橋筋のつら島町南入河内屋太助

大阪	河内屋喜兵衛	東京	須原屋茂兵衛
同	伊川屋善兵衛	同	山城屋佐兵衛
同	敷賀屋九兵衛	同	小林新兵衛
同	秋田屋太右門	同	丸屋善七
同	河内屋茂兵衛	同	和泉屋市兵衛
同	河内屋和助	同	須原屋伊八
同	秋田屋市兵衛	同	出雲寺萬治郎
同	出雲寺文次郎	同	梶屋喜兵衛
同	村上勘兵衛	同	近江屋半七
同	勝村治右衛門	同	長門屋龜七
同	杉本甚助	同	三家村佑半

名山閣

東京芝大神宮前書舖 和泉屋吉兵衛發售

